

鹿屋体育大学における保健体育科教育法Ⅲの 授業モデルに関する事例的検討 －授業改善の繰り返しによる取組から－

梶 ちか子*, 浜田幸史*, 鵜木親志*

Chikako KAKOI, Koji HAMADA, Chikashi UNOKI

【英文抄録】

In the mock lesson at the teacher training stage, the number of lesson hours is limited, and if the number of students is large, it may be difficult to secure time for lesson planning, mock lesson teaching plan creation, teaching materials, etc. through the unit. Therefore, it is necessary to devise the development and structure of the lessons. In this study, based on the outline of the lesson practice of “Health and Physical Education Method III” and the post-questionnaire, we will examine the results and issues of the lesson model including the mock lesson at our university as a case study. The target class was a series of classes conducted in the “physical education” area in “Health and Physical Education Law III.” The results showed that many students realized that experiencing a series of tasks such as unit planning, teaching plan creation, teaching material examination, mock lessons, and reflection is effective for developing lesson composition skills and improving lesson skills. It was suggested that this technique may have worked effectively to grasp the students’ own tasks.

Keywords: Teacher training, Microteaching, Unit structure diagram, Teaching plan creation, Examination of teaching materials

I. 緒言

2017年にまとめられた「教職課程コアカリキュラム」において、全国すべての大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力が示された。その中の「各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の「全体目標」には、「当該教科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された当該教科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深めるとともに、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける」と示され、「到達目標」において、「具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案の作成」や「模擬授業の実施とその振り返り」などが明記されている。つまり、学校現場で、教員が授

業を行う際のプロセスを想定し、単元計画を作成し、指導内容の選定、学習過程の検討、指導と評価のタイミングの決定、指導案の作成、教材・教具の開発、授業の実施、授業改善の振り返りまでを含めて授業を行う必要がある。

教員養成系大学の保健体育科教育の関連科目においては、「実践的指導力」^{注1)}の育成を目指し、学生自身が教師役や生徒役となって実施する模擬授業が各大学において実施されている。模擬授業の実施は、授業の基礎的条件（高橋，2010；高橋・岡澤，1994）と関連する教授技術の習得や、授業を省察する力、体育授業の実施に必要な知識（授業観察の観点、教材）の育成に有効であると報告されている（藤田，2015；木原，2010）。近年においては、模擬授業を取り入れた授業実践の

* 鹿屋体育大学 スポーツ人文・応用社会科学系

方法や学習成果について（白石, 2013; 宮尾ほか, 2015; 木山, 2016; 長谷川, 2016; 黒須・木村, 2017; 木村・黒須, 2018; 鈴木, 2019）や、模擬授業後の省察について分析をした試み（田井ほか, 2018; 安倍ほか, 2018; 川口, 2018; 大西ほか, 2018）、教材づくりに焦点を当てた事例（藤田, 2017）等、多様な報告がなされている。

一方で、模擬授業実施の課題として、学生全員に模擬授業を経験させようとする単発的な授業になりがちで、単元を通しての授業構想や授業実践の力を育みにくいことが指摘されてきた（日野・谷本, 2009）。また、藤田・池田（2010）も、模擬授業においては、授業づくりの段階に対する受講生のニーズが高く、模擬授業に向けての指導案作成と教材作成に十分な時間を充当すること、それらに関わる情報を模擬授業前に十分に提供する必要があることを指摘している。教員養成段階の模擬授業の実施にあたっては、授業時間数の制限があり、また受講者数も多数の場合、単元を通しての授業構想や模擬授業の実施に向けての指導案作成、教材作成に関わる時間の確保等が困難である場合も多く、授業の展開・構成には工夫が必要である。

近年では、模擬授業実施までの学習プロセスに単元計画の作成を取り入れた取組について、学生たちが授業の全体像を捉える視点を持ち、前後の内容を踏まえた学習段階と段階に応じた学習活動の明確化に繋がったと報告されている（木村・黒

須, 2019）。また、清水ほか（2014）は、学習指導案の本時の展開案を作成するにあたり、単元計画部分を充実させることが必要であるし、そのために単元構造図の利用が有効であると示している。

以上の課題や報告を受け、本学では、保健体育科教育法全体の授業内容を系統化し（図1）、保健体育科教育法Ⅲ・Ⅳについては、講義・演習科目として、教育実習に向けた実践的指導力を育成することをねらいとして、単元計画（単元構造図）の作成、指導案作成、教材検討、模擬授業、省察までの一連の授業づくりの工程を実践できるよう工夫している。保健体育科教育法Ⅳについては、単元構造図の作成、指導案作成、教材検討、模擬授業、学外授業体験、映像視聴を取り入れた省察という一連の授業システムを構築し、その成果と課題について報告した（佐藤・梶, 2015; 佐藤・梶, 2016）。この保健体育科教育法Ⅳの授業は、より高い授業実践力を育成することをねらいとしているため、原則として受講生を教員採用試験受験希望者に限定しており、3名の担当教員に対し、例年、受講生は20名前後である。

本稿では、例年100名を超える受講生が履修する保健体育科教育法Ⅲの中の「体づくり運動」領域について、2018年度の授業実践と2019年度の授業実践を通して、単元計画の作成、指導案作成、教材検討、模擬授業、省察までの一連の授業モデルの成果と課題について事例的に検討する。

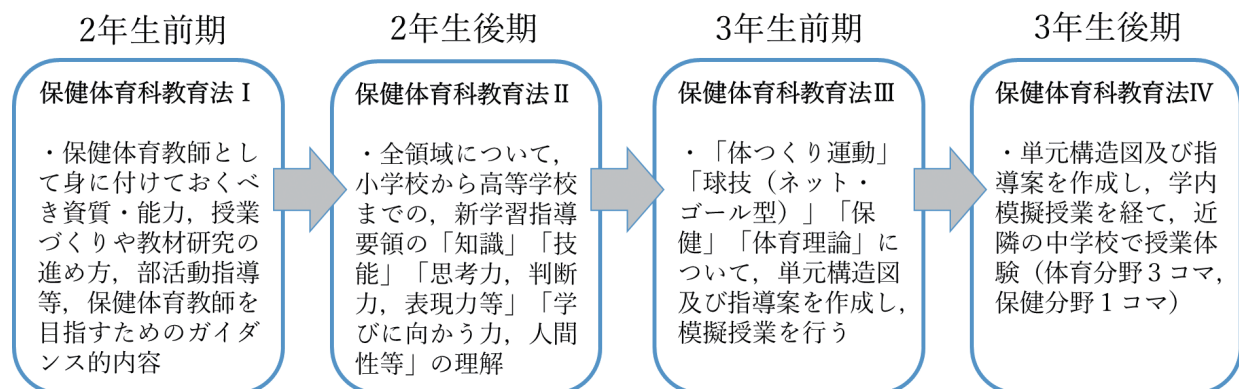


図1 鹿屋体育大学における保健体育科教育法Ⅰ～Ⅳの流れ

Ⅱ. 方法

本学で3年生を対象として開講している保健体育科教育法Ⅲは、「中学校教諭一種免許状（保健体育）」並びに「高等学校教諭一種免許状（保健体育）」の取得のために必要で、原則として基礎科目である保健体育科教育法Ⅰ・保健体育科教育法Ⅱの履修を終えた学生が受講する。本稿においては、この保健体育科教育法Ⅲの中の「体づくり運動」領域で実施した一連の授業（講義1コマ及び単元計画の作成、指導案作成、教材検討、模擬授業、省察を1日で行う5コマ分の集中授業）を対象とする。

本研究は、「デザイン研究」の手法に基づいて実施した。「デザイン研究」とは、研究仮説に基づき、実際に実践をつくりあげていくことで、その仮説は確かなものになるとの考え方から、教育実践をデザインし、実際に行い、その成果を確かめ、比較ではなく、うまくいった方法がうまくいった理由を探り、同じような良い例を蓄積することで仮説を確かめていくアプローチの研究である（鈴木・根本, 2013, 図2）。この方法は、授業場面において、複眼的に何が起きるかを観察し、厳密さは多少犠牲にしながらも次の実践に直接役立つような知見を得ることを目指すもので（鈴木・根本, 2013）、授業実践の形成的評価を通してデザインする授業あるいは学習環境を徐々に精錬することで学習理論を確立していく研究方法である（大島・大島, 2009）。

まず、本研究において、デザイン研究プロセスの「1. 問題の同定と分析」と「2. デザイン決定と改善」に相当するのは、前述した通り、多くの先行研究や先行事例から、保健体育科教育法全体の授業内容を系統化し、実践的指導力を育成することをねらいとした保健体育科教育法Ⅲ・Ⅳについて、「単元計画（単元構造図）の作成、指導案作成、教材検討、模擬授業、省察」までの一連の授業モデルを構想した過程にあたる。

その上で「3. 結果の整理：実践において問題解決のためのテストと改善の反復を行う」過程が、本研究の主題となる2018年度と2019年度の実践に当たる。まず、2018年度に実施した「保健体育科教育法Ⅲ」の中の「体づくり運動」領域での授業実践から、成果と課題を検証した。その後、その検証結果を基に、2019年度の授業を改善・実施し、授業実施後の振り返りアンケート結果を2018年度の結果と比較した。

以上の実践から、「単元計画の作成、指導案作成、教材検討、模擬授業、省察」までの一連の授業モデルの成果と課題について検討し、本研究における「デザイン原則」を提案しようと試みた。

次項からは、「3. 結果の整理：実践において問題解決のためのテストと改善の反復を行う」に相当する、2018年度と2019年度の実践について述べ、最終章で、本研究における「デザイン原則」を提案する。

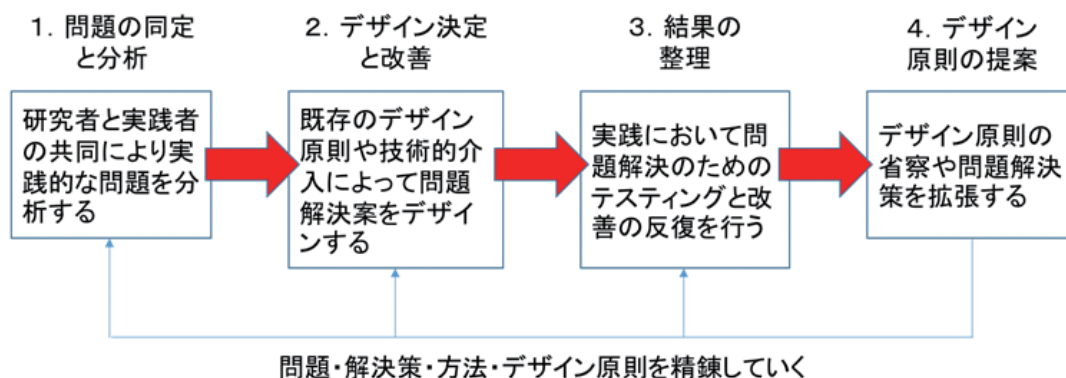


図2 デザイン研究プロセス

※ Reeves (2006) の図を根本ほか (2011) が翻訳したものの

Ⅲ. 2018年度保健体育科教育法の授業概要

1. 履修・開講状況

受講生は、大学3年生の112名と科目等履修生1名で、全員が教育実習前の時期であった。授業回数は全15コマで、1時間目にオリエンテーション（全受講生一斉）、2時間目に単元計画・授業づくりの基礎（全受講生一斉）の講義を実施した後、受講生は「体づくり運動」「球技（ゴール型・ネット型）」「体育理論・保健」の3領域から2領域を選択し、第1期・第2期にそれぞれ選択した領域に分かれて授業を実施した。15回目の授業は

まとめ（全受講生一斉）を行った。領域別の授業は、6時間配当し、1コマは通常の平日の時間割の時間での講義、5コマは集中講義（土曜日・1日）で実施した（図3）。

授業担当教員は3名で、領域別の授業では、教員A（筆者）が「体づくり運動」を、教員Bが「球技（ゴール型・ネット型）」を、教員Cが「体育理論・保健」を実施した（表1）。学生には、1時間目のオリエンテーション時に、希望する領域と日程を調査し、その後、教員側で調整を行った（表2）。

		第1期							第2期						
		集中授業							集中授業						
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
オリエンテーション	単元計画・授業づくり基礎	3領域から選択	体づくり運動					体づくり運動					授業まとめ		
			領域解説、単元計画作成、指導案作成 模擬授業（マイクロティーチング）					領域解説、単元計画作成、指導案作成 模擬授業（マイクロティーチング）							
			球技（ゴール型）					球技（ネット型）							
			領域解説、単元計画作成、指導案作成 模擬授業（マイクロティーチング）					領域解説、単元計画作成、指導案作成 模擬授業（マイクロティーチング）							
			体育理論					保健							
			領域解説、単元計画作成、指導案作成 模擬授業（マイクロティーチング）					領域解説、単元計画作成、指導案作成 模擬授業（マイクロティーチング）							

図3 鹿屋体育大学における保健体育科教育法Ⅲ15コマの授業計画

表1 教員別の担当授業

担当教員	第1期	第2期
教員A	体づくり運動	体づくり運動
教員B	球技（ゴール型）	球技（ネット型）
教員C	体育理論	保健

表2 2018年度保健体育科教育法Ⅲの集中授業日程表

担当	第1期		第2期	
教員A	5月12日 体づくり運動 39名	—	6月2日 体づくり運動 27名	—
教員B	5月12日 球技（ゴール型） 31名	—	6月2日 球技（ネット型） 21名	6月23日 球技（ネット型） 25名
教員C	5月12日 体育理論 12名	5月25日 体育理論 33名	6月2日 保健 29名	—

2. 「体づくり運動」領域の授業概要

6時間の配当時間のうち1時間目の講義では、子どもの体力の状況と対策について、新体力テストや平成20年告示の学習指導要領の課題等のデータを示しながら説明し、平成29年告示の新学習指導要領解説に基づいた「体づくり運動」の内容について復習した(保健体育科教育法Ⅱで学習指導要領の内容については学習済み)。その後、簡易単元構造図の作成方法を説明し、その上で、集中授業5時間分の流れを簡単に説明して、受講生を8グループに分け(男女比・専門種目が偏らないよう考慮・5名/1グループ)、グループで担当する模擬授業の内容の選択、役割分担を行った。集中授業では、中学校第1学年の内容を実施することとし、「体ほぐしの運動」「体の柔らかさ」「力

強い動き」「巧みな動き」「動きを持続する能力」「運動の組み合わせ」の中からグループで担当する内容を選択させた。また、グループ内では、模擬授業の際に、授業説明1名、授業者3名、協議会進行役1名で役割を分担させた。

5時間(1日)の集中授業は、午前中にグループで簡易単元構造図の作成を行った。中学校第1学年の7時間分の単元計画を、グループで意見を出し合って完成させる作業を行った(図4)。簡易単元構造図が完成したグループから、午後からの模擬授業に向け、グループ担当の内容を含む1時間の指導案と教材・教具づくり及び授業分析の方法について教授し、グループで作業させた。

午後からの模擬授業では、1グループに30分担当し、単元計画や授業内容等の授業説明を5分、

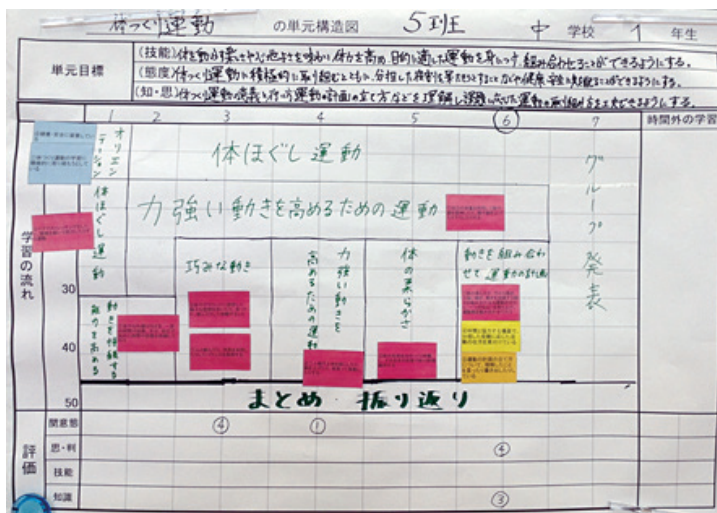
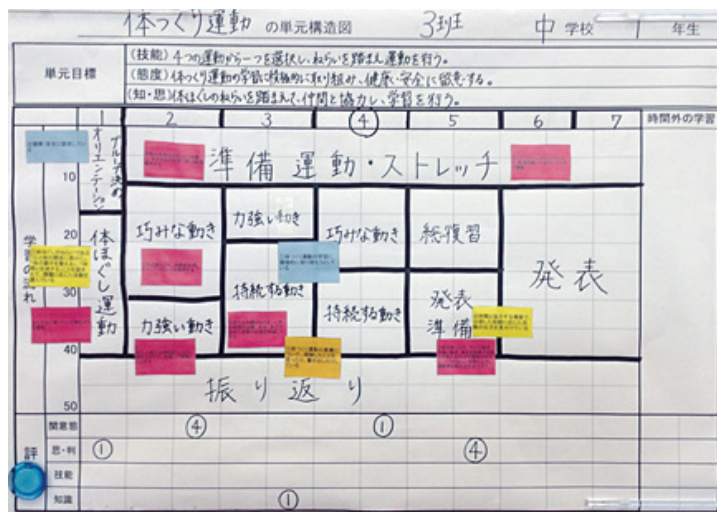


図4 作成した簡易単元構造図の一例(2018年度)

保健体育科教育法Ⅲ 模擬授業観察者用チェックシート									
観察日 年 月 日					観察者氏名 _____				
観察したグループ _____ 班									
運動									
学習内容									
評価		声の大きさ	説明・指示の	発問	賞賛	示範	観察	安全	コメント
大変よい — 悪い		視線・表情	的確さ・工夫	応答		技術	巡回	危機管理	
5	4	3	2	1					
①	さん								
②	さん								
全体を通して気づいた点									

図5 マイクロティーチングで活用した観察者シート

マイクロティーチング^{注2)} 15分 (1人5分×3名), 協議会(振り返り) 5分, 交代・休憩・準備5分とした。マイクロティーチング中は, 教師役以外のグループの受講生は, 図5の観察者シートを活用して, 教師役でも生徒役でもない観察者として, 客観的に授業を分析するよう指示した。

3. 授業省察：事後アンケートの結果及び教員の省察

集中授業の最後に, 受講生全員を対象にアンケートを実施した。午前中の活動である「簡易単元構造図作成及び授業計画作成」について12項

目, 午後からの活動である「模擬授業：マイクロティーチング」について14項目, 「集中授業全体」の振り返り3項目を, 5件法(1:全くそう思わない~5:とてもそう思う)で回答させた。

その結果, 「簡易単元構造図作成及び授業計画作成」は全ての項目の平均値が 4.5 ± 0.1 点, 「模擬授業：マイクロティーチング」の平均値が 4.6 ± 0.1 点と, 「集中授業全体」の振り返りの平均値が 4.7 ± 0.2 点と, いずれの項目も4.5点以上であった。したがって, 本授業展開は, 学習指導要領の内容の理解が深まり, 授業構成員の育成や授業スキルの向上に有効である可能性が示唆された。しかし

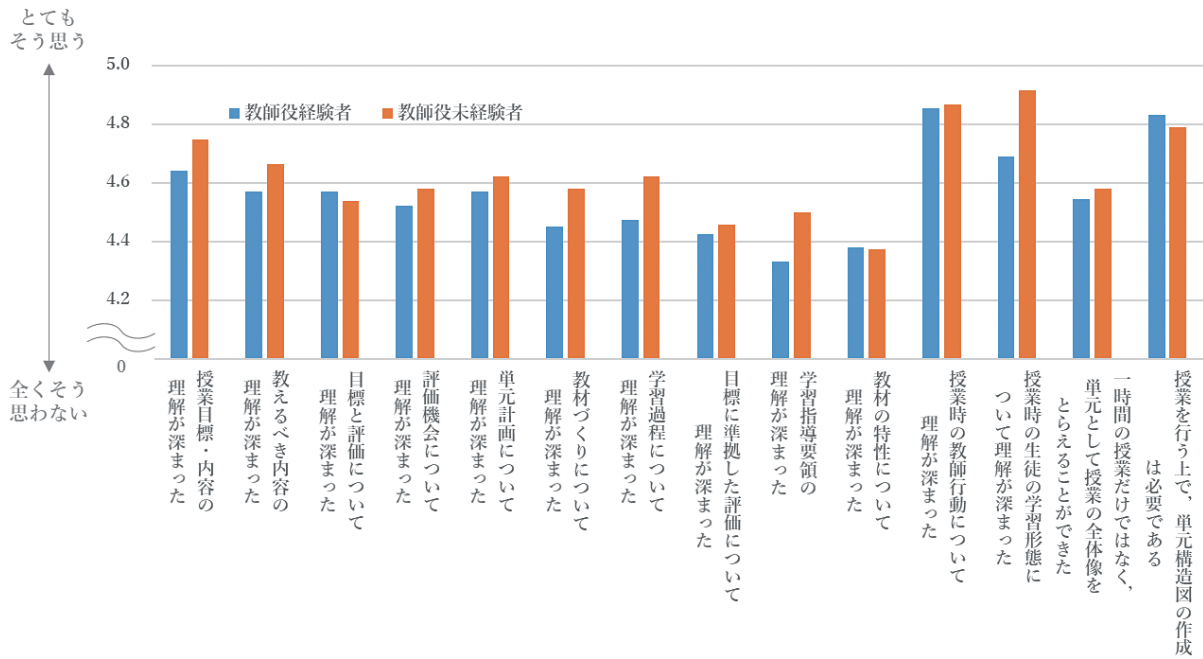


図6 「簡易単元構造図作成及び授業計画作成」についての振り返り

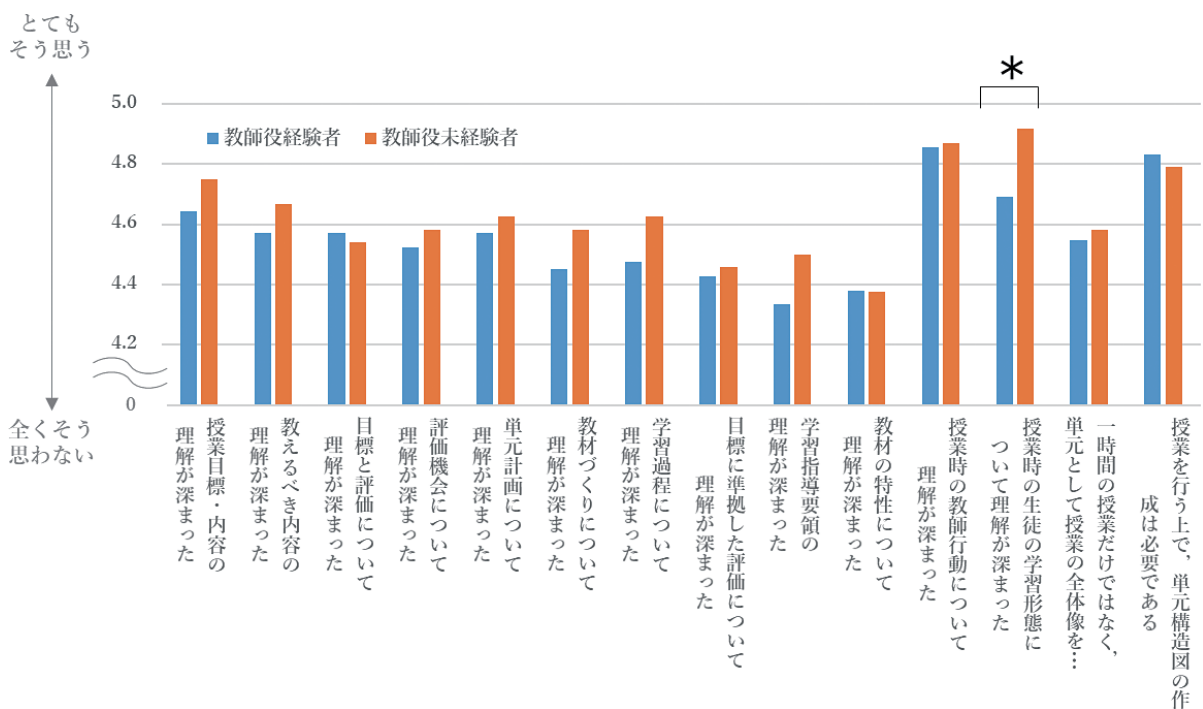


図7 「模擬授業：マイクロティーチング」についての振り返り

ながら、マイクロティーチングで教師役を経験したか否かで項目別に分析したところ、有意差が得られた項目こそ1項目のみであったものの、全体的な傾向として教師役未経験者の方が理解の深まりを実感している結果となり、授業後の課題意識に差異が認められた(図6, 図7)。「集中授業全

体」の振り返りにおいての「本日の集中授業を受講して、自分自身の課題が明確になった」については、教師役経験者が 4.7 ± 0.4 点、教師約未経験者が 4.6 ± 0.6 点と、教師役経験者の方が課題を明確に感じており、教師役を経験したからこそ、授業の理解度について厳しく省察したのではないか

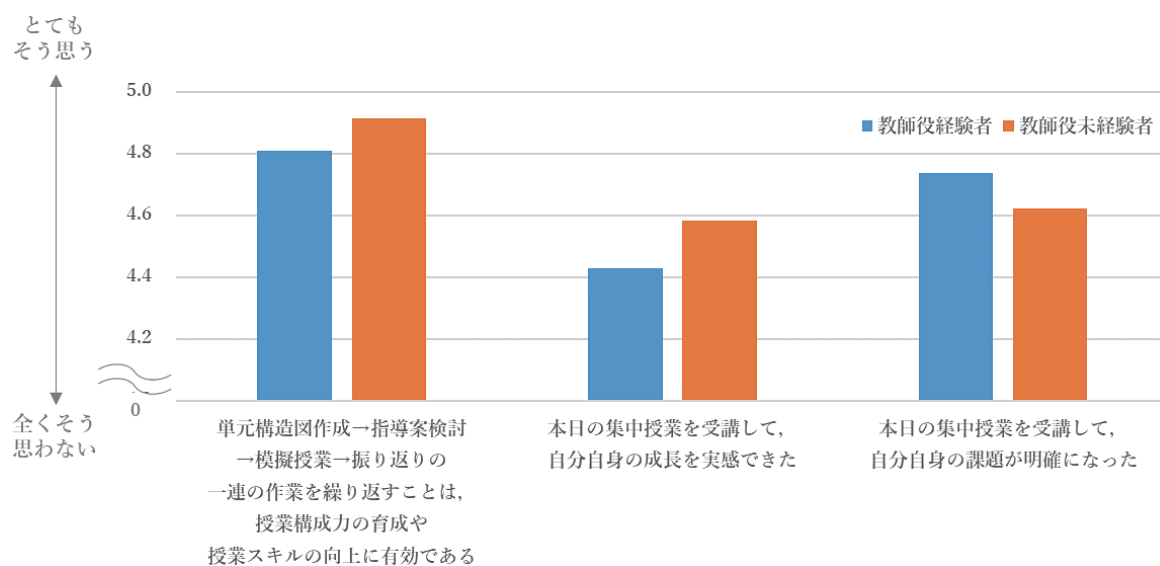


図8 「集中授業全体」についての振り返り

表3 2019年度保健体育科教育法Ⅲの集中授業日程表

担当	第1期		第2期	
教員A	5月11日 体づくり運動 20名	5月25日 体づくり運動 19名	6月15日 体づくり運動 19名	6月22日 体づくり運動 17名
教員B	5月18日 球技（ゴール型） 20名	6月1日 球技（ゴール型） 22名	6月8日 球技（ネット型） 19名	6月22日 球技（ネット型） 19名
教員C	5月11日 体育理論 12名	5月25日 体育理論 18名	6月15日 保健 17名	6月22日 保健 19名

と推察された（図8）。2018年度は、1回の授業あたりの受講人数が多く（1回目：39名、2回目27名）、全員が教師役を経験できず、1人あたりのマイクロティーチングの時間も5分程度と少なかったことから、全員が教師役を経験し、なおかつマイクロティーチングの時間を増加できるような工夫が課題として残された。

教員側の反省点として、1グループあたりの人数を5名としたが、午前中のグループ活動の関わり方に差が見られたこと、また、単元計画の際の簡易単元構造図の作成手順についての説明不足から、簡易単元構造図作成に時間が割かれ（約160分）、指導案作成・教材検討（約50分）が不十分であったことが挙げられた。したがって、上述した学生の振り返りアンケートの結果も含め、受講人数を制限し、1グループの人数を減らすこと、

また、集中授業前の講義の1時間も含め、簡易単元構造図の説明を詳細に行い、単元計画・指導案・教材・教具の検討に時間を十分に確保できるよう、授業時間の配分に工夫が必要であることが明らかとなった。

Ⅳ. 2019年度保健体育科教育法の授業概要

1. 履修・開講状況

受講生は、大学3年生の106名と4年生3名であった。授業全15コマの流れは2018年度と同様で、第2期にそれぞれ選択した領域に分かれて授業を実施した。1回の集中授業あたりの受講者数を制限するため、2018年度よりも集中授業の回数を増加させた。その結果、各領域の集中授業の受講者数は、12名～22名となった（表3）。

2. 「体づくり運動」領域の授業概要

2018年度の授業からの改善点は、まず、6時間の配当時間のうち1時間目の講義において、簡易単元構造図の作成方法を詳細に説明し、参考資料も追加配布した。さらに、集中授業までの課題として、簡易単元構造図を各自で考案し、作成してくるよう指示をした。また、グループ数を6グループに減らして、1グループの人数を原則3名とし、全員が教師役を経験し、1人当たりのマイクロティーチングの時間を8分に設定した。

集中授業は、基本的には、2018年度と同様に、午前中にグループで簡易単元構造図の作成、午後から模擬授業を実施した。午前中の簡易単元構造図作成のグループワークでは、まず、各自が課題

として作成してきた簡易単元構造図を発表し合い、様々な意見を取り入れながら、グループであらためて簡易単元構造図を作成するよう指導した。その後、全体で1時間分の指導案の作成方法、教材・教具づくり、授業分析を教授し、グループでの作業時間とした。結果的に、簡易単元構造図作成に120分、指導案作成・教材検討に90分を配当できた(図9)。

午後からの模擬授業では、1グループに40分相当し、単元計画や授業内容等の授業説明を2分、マイクロティーチング25分(1人8分×3名)、協議会(振り返り)8分、交代・休憩・準備5分とした。

体づくり運動の単元構造図		中学校 年生		グループメンバー		
単元目標		(知・運) 次の運動を通して、体の柔軟性を高め、体の運動能力を向上させ、健康な生活を送ることに努めること。 (思・判・表) 運動の楽しさや、運動の楽しさを伝えること、運動の楽しさを伝えること、運動の楽しさを伝えること。 (学び) 健康な生活を送るために、体の柔軟性を高め、体の運動能力を向上させること。				
学習の流れ	10	オリエンテーション	挨拶・健康観察・本時のねらい			指導の工夫
	20	ストレッチ	体ほぐし運動			グループ活動
	30	マイク	体の柔らかさを高める運動	力強い動き	動きを持続させる能力	動きの組み合わせ
	40	マイク	巧みは動き			
	50	マイク	整理運動			
評価	知・運	①		④	⑥	
思・判・表			③	③	④	
学び		①	⑤			

体づくり運動の単元構造図		中学校 年生		グループメンバー		
単元目標		(知・運) 次の運動を通して、体の柔軟性を高め、体の運動能力を向上させ、健康な生活を送ることに努めること。 (思・判・表) 運動の楽しさや、運動の楽しさを伝えること、運動の楽しさを伝えること、運動の楽しさを伝えること。 (学び) 健康な生活を送るために、体の柔軟性を高め、体の運動能力を向上させること。				
学習の流れ	10	オリエンテーション	体ほぐし運動			指導の工夫
	20	体ほぐし運動	巧みは動きを高める運動			バックストレッチ・ランニング補助
	30	バックストレッチ	体の柔らかさを高める運動			運動の言い回し
	40	マイク	整理 体交換運動			運動の組み合わせ
	50	マイク	片づけ・本時の振り返り(学習カード)・次回の連絡			
評価	知・運	②		②	⑥	
思・判・表		①			④	③
学び		①		①	④	③

図9 作成した簡易単元構造図の一例(2019年度)

3. 授業省察：事後アンケートの結果及び教員の省察

2018年度と同様に、集中授業の最後に、受講生全員を対象にアンケートを実施した。その結果、「簡易単元構造図作成及び授業計画作成」は全ての項目の平均値が 4.6 ± 0.1 点で、2018年度よりも

高い得点を示した。「単元計画について理解が深まった」「教材づくりについて理解が深まった」「1時間の授業だけではなく、単元として授業の全体像をとらえることができた」の3項目においては、2018年度の数値と比較して明らかに高かった（図10, t検定： $p < 0.05$ ）。集中授業前の講義

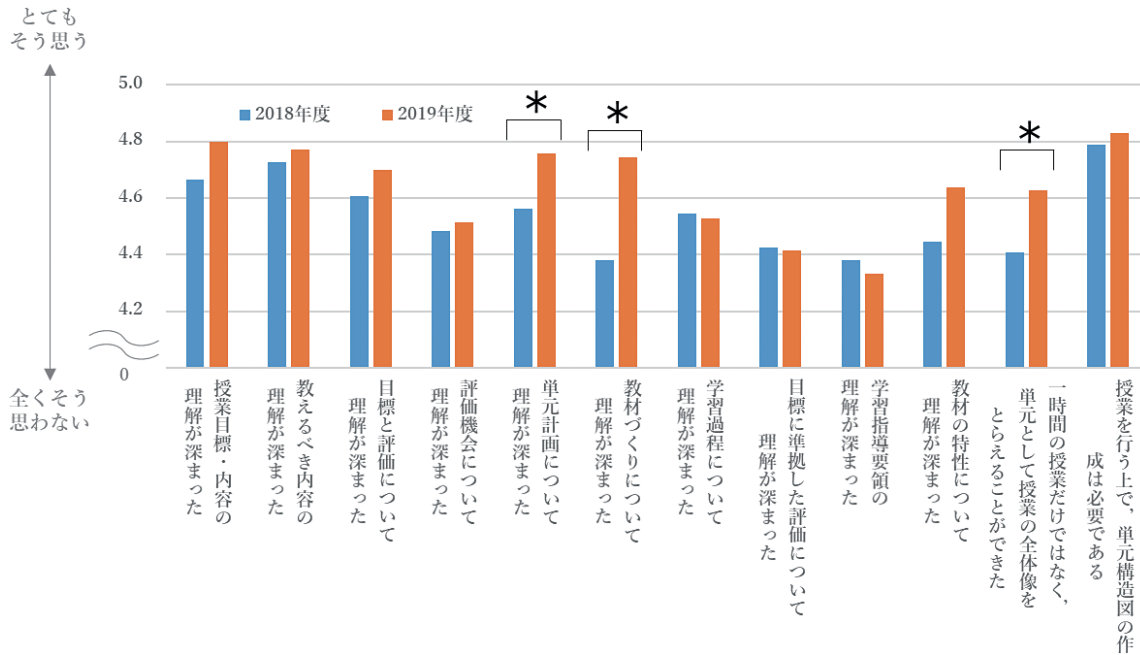


図10 「簡易単元構造図作成及び授業計画作成」についての振り返り * : $p < 0.05$ (2018年度と2019年度の比較)

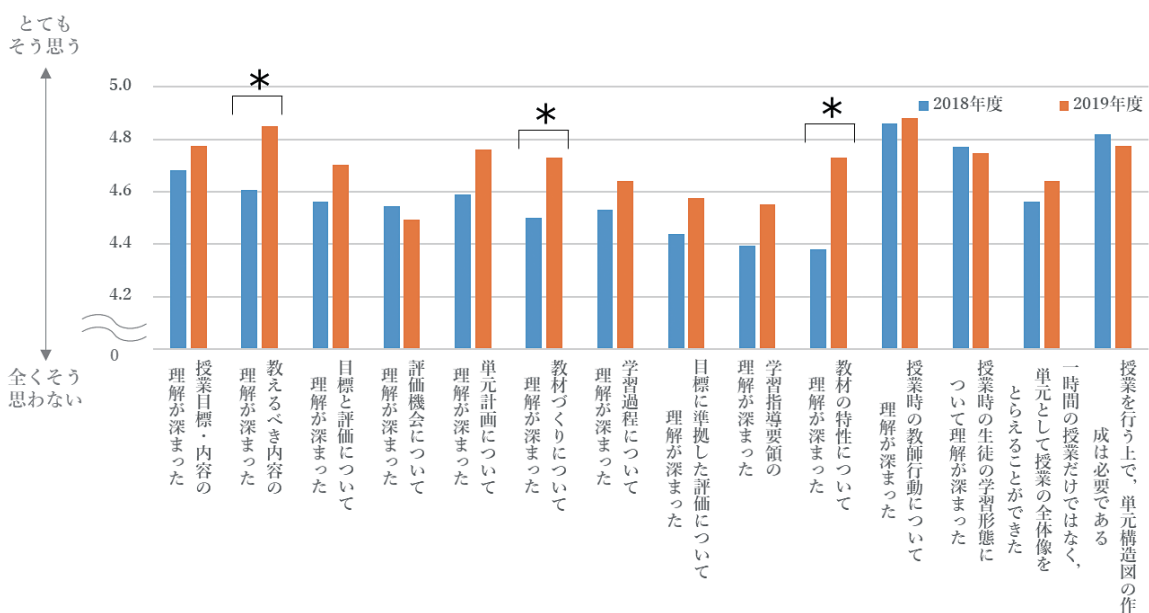


図11 「模擬授業：マイクロティーチング」についての振り返り * : $p < 0.05$ (2018年度と2019年度の比較)

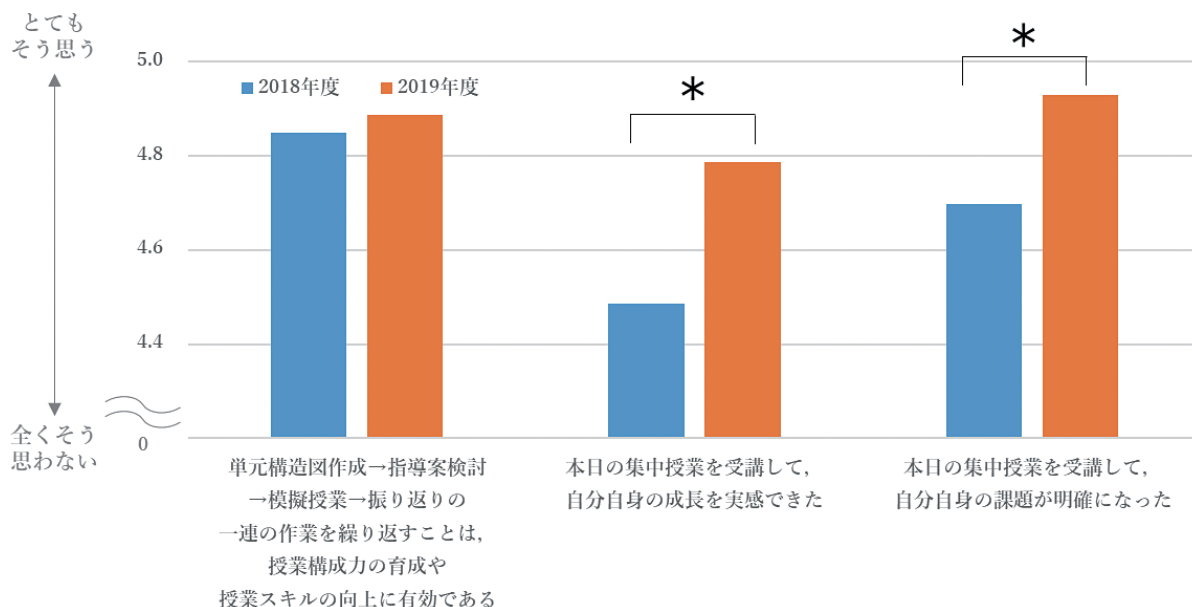


図12 「集中授業全体」についての振り返り
(2018年度と2019年度の比較)

* ; $p < 0.05$

時に簡易単元構造図の説明を詳細に行い、各自授業時間外で作成してきた簡易単元構造図をもとに単元計画を立て、指導案・教材・教具の検討の時間を十分確保できたことが、この結果に繋がったのではないかと考えられた。「模擬授業：マイクロティーチング」の平均値も 4.7 ± 0.1 点で、2018年度より高得点となった。「教えるべき内容の理解が深まった」「教材づくりについて理解が深まった」「教材の特性について理解が深まった」の3項目においては、2018年度と比較して明らかに高かった(図11, t検定: $p < 0.05$)。「教材」に関する項目で差が見られたことから、ここでも午前中のグループワークで教材検討の時間を確保できたことが関連していると考えられた。「集中授業全体」の振り返りの平均値の 4.9 ± 0.1 点も、2018年度よりも高く、「本日の集中授業を受講して、自分自身の成長を実感できた」「本日の集中授業を受講して、自分自身の課題が明確になった」の2項目は、2018年度と比較して、有意に高い得点を示した(図12, t検定: $p < 0.05$)。

教員側の振り返りとしても、グループワークにおいて、学生が主体的に参加している姿が見受けられ、簡易単元構造図の完成度も高かった。また、

指導案・教材づくりの時間をしっかりと確保できたことで、マイクロティーチングの準備について学生が余裕を持って取り組んでいる様子が観察できた。また、全員が教師役を経験することで、学生自身の意識が高まり、マイクロティーチングを実施するごとに授業の質も向上して、良い授業展開ができていた。

V. 本研究における「デザイン原則」の提案

2018年度及び2019年度の保健体育科教育法Ⅲの授業について、単元計画→指導案作成・教材検討→模擬授業：マイクロティーチング→省察の一連の授業モデルに基づき実施した。

2018年度の授業実践での成果と課題を踏まえ、2019年度の授業では、教員1人あたりの集中授業の回数を増やし、受講生を分散させることで、1回あたりの模擬授業の受講人数を制限した。その結果、受講生全員に教師役を経験させることができ、また1人あたりの模擬授業時間も3分程度増加できた。さらに、講義時の簡易単元構造図の作成についての説明時間を十分に確保し、参考資料も追加配布したことで、集中授業において、指導案作成・教材検討に費やす時間を40分程度増加す

ることができた。授業後の振り返りアンケートでは、2018年度の結果と比較して、ほとんどの項目でポイントが上昇し、特に、教材づくりや教材の特性の理解については、2018年度と比較して明らかに高値を示した。また、学生自身の成長の実感及び課題発見についての項目についても有意に向上した。したがって、2019年度に実施した授業実践は、2018年度の課題の克服によって、より良い学習成果が得られるものとなった。

以上の結果から、単元計画→指導案作成・教材検討→模擬授業：マイクロティーチング→省察の一連の授業モデルに基づき実施した保健体育科教育法Ⅲの授業は、学習指導要領の内容の理解や、単元計画や授業実施に関わる授業構成力の育成や教授スキルの向上に一定の成果が認められ、この授業モデルの有効性が示唆された。したがって、この「単元計画→指導案作成・教材検討→模擬授業：マイクロティーチング→省察」の一連の授業モデルを本研究における「デザイン原則」として導き出すことができた。

VI. 今後の課題

本研究では、2018年度と2019年度の実践をもとに、「単元計画→指導案作成・教材検討→模擬授業：マイクロティーチング→省察」という一連の授業モデルの有効性を示すことができた。今後は、この授業モデルに WebClass^{注3)} や Webex^{注4)} 等を効果的に取り入れ、ICT 活用も積極的に取り入れながら、授業時間外学習や授業分析、省察方法の充実を促せるよう、検証を続けていきたい。また、保健体育科教育法Ⅲの授業のさらなる充実を図るため、1回の集中授業あたりの受講者数を制限し、学生一人当たりの教師役の経験回数や時間を増加させたり、「体づくり運動」「球技（ゴール型・ネット型）」「体育理論・保健」以外の領域も体験できるよう工夫することが求められる。しかし、1回の集中授業あたりの受講者数を制限したり、領域数を増加させることは、集中授業の回数を増加させることとなり、その分、教員の時間

的拘束が多くなり、教員の業務負担が増えることは否めない。昨今、教員の働き方改革も叫ばれる中、常に様々な課題点を視野に入れながら、その時々で最良の方法を模索しながら、学生にとってより良い授業づくりを検証し続ける必要があると考える。

注1) 日本教育大学協会(2004)は、教員養成課程のカリキュラムの基軸を「教育実践を科学的・研究的に省察する力」とし、養成課程全体で「実践的指導力」を育成する方向性を示した。さらに、2012年の答申(文部科学省)では、実践的指導力について「基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探求型の学習、協働的学び等とデザインできる指導力」と示された。

注2) マイクロティーチングは、Allen & Ryan によって開発された、授業法を学ぶための実践的な練習方法である。学生が教師役となり、学生を生徒役として、授業範囲を短縮し、教授行為の要因や教授技術に含まれる特定の要素的スキルに焦点を当て、5～20分の短い授業で授業を行うことを指す(教育方法学会編, 2005, p.507)。

注3) WebClass は、日本の大学向けに開発されている e-Learning システムで、鹿屋体育大学では2003年より導入されている。PC やタブレット、スマートフォンから利用可能で、資料の閲覧やレポート提出機能、出席管理機能等がある。

注4) Cisco Webex は、Web 会議室システムで、インターネット経由で、複数人でのコミュニケーションが可能なツールである。本学では、講義型授業や会議等で主として用いられている。

参考文献

- 安倍健太郎, 大西祐司, 住本純 (2018) 体育科模擬授業における教師役経験を通して身に付ける省察の観点. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 15: 63-71.
- Allen, D. & Ryan, K. (1969) *Microteaching*. Addison-Wesley, Massachusetts.
- 藤田育郎, 池田延行 (2010) 体育科模擬授業の効果的な実施方法に関する検討. 国士館大学体育研究所報, 29: 95-99.
- 藤田育郎 (2015) 大学における模擬授業の手法とその成果. 日本体育科教育学会編, 新版体育科教育学の現在. 創文企画, pp.210-223.
- 藤田育郎 (2017) 教材づくりに焦点を当てた体育模擬授業の実施方略に関する事例的検討. 体育学研究, 62: 757-771.
- 長谷川望 (2016) 模擬授業及び振り返り方法の検討. 東邦学誌, 45(2): 99-107.
- 日野克博, 谷本雄一 (2009) 大学の模擬授業並びに教育実習における省察の構造. 愛媛大学教育学部保健体育紀要, 6: 41-47.
- 川口諒 (2018) 体育教員養成課程の模擬授業における学生の「リフレクション」の実態に関する事例研究－他者の実践を対象とした協議会における「リフレクション」に着目して. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部, 67: 259-268.
- 木原成一郎 (2010) 模擬授業の意義と方法. 梅野圭史ほか編著, 教師として育つ－体育授業の実践的指導力を育むには－. 明和出版, pp.40-42.
- 木村華織, 黒須雅弘 (2018) 保健体育教員養成課程における学習指導案作成と模擬授業の実践－「保健体育科教育法(陸上)」の取り組み－. 東海学園大学教育研究紀要, 4: 35-46.
- 木村華織, 黒須雅弘 (2019) 「保健体育科教育法(陸上)」の授業報告－単元計画の作成と対面指導の取り組み－. 東海学園大学教育研究紀要, 5: 54-64.
- 木山慶子 (2016) 教員養成における模擬授業の学習成果の検討－学生による授業分析を用いた省察から－. 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 51: 83-93.
- 黒須雅弘, 木村華織 (2017) リアリティのある模擬授業の実施方法－「保健体育科教育法(陸上)」の授業報告－. 東海学園大学教育研究紀要, 3: 77-85.
- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (2017) 教職課程コアカリキュラム. https://www.mext.go.jp/content/1421964_2_1_2.pdf
- 宮尾夏姫, 三木ひろみ, 柴田俊和 (2015) 体育科模擬授業における学習成果: 授業・授業づくりの要点の理解と学習を促す授業体験の事例的検討. びわこ成蹊スポーツ大学紀要12: 93-104.
- 文部科学省 (2012) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について. 中央教育審議会答申. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf 閲覧日: 2021-07-26.
- 根本淳子・柴田喜幸・鈴木克明 (2011) 学習デザインの改善と学習の深化を目指したデザイン研究アプローチを用いた実践. 日本教育工学会論文誌, 35(3): 259-268.
- 日本教育大学協会 (2004) 「教員養成の『モデル・コア・カリキュラム』」の検討－『教員養成コア科目群』を基軸にしたカリキュラムづくりの提案－. 『会報』第88号, pp.10.
- 日本教育方法学会編 (2005) 「マイクロティーチング」. 現代教育方法辞典, 図書文化社, pp.206.
- 大西祐司, 股村美里, 高松靖, 安倍健太郎, 黒澤宏己, 川合英之, 谷川尚己, 柴田俊和 (2018) 体育科模擬授業における協働的な省察の実態: 発話内容の知識の頻度に着目して. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 15: 23-32.
- 大島純, 大島律子 (2009) エビデンスに基づいた教育: 認知科学・学習科学からの展望. 認知科

- 学, 16(3) : 390-414.
- Reeves.T.C. (2006) Design Research from a Technology perspective. In J. van den Akker, Gravemeijer, S., McKenney, & N. Nieveen (Eds.), Educational Design Research, Routledge, London, pp.52-66.
- 佐藤豊, 梶ちか子 (2015) 単元構造図, 模擬授業, 映像視聴の連続体験による体育科教員養成授業モデルの検討－鹿屋体育大学における2013年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察から－. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 51 : 11-24.
- 佐藤豊, 梶ちか子 (2016) 鹿屋体育大学における2014年度保健体育科教育法Ⅳの授業実践とその省察－体験学習モデルに基づくアクティブ・ラーニング型授業における実践的指導力育成システムの構築に向けて－. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 52 : 35-67.
- 清水将, 清水茂幸, 栗林徹, 鎌田安久, 澤村省逸, 上濱龍也 (2014) 体育科教育における教員養成と現職研修を融合する教職実践演習のあり方に関する検討－学習指導案の単元計画と評価計画に着目して－. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 13 : 79-88.
- 白石晃 (2013) 教員養成教育における模擬授業の取り組み－「保健体育科指導法2」の授業実践から－. 天理大学学报, 233 : 99-123.
- 鈴木克明, 根本淳子 (2013) 教育改善と研究実績の両立を目指して；デザイン研究論文を書こう. 医療職の能力開発：日本医療教授システム学会論文誌, 2(1) : 45-53.
- 鈴木慶子 (2019) 駿河台大学保健体育科教職課程における模擬授業の現状と課題. 駿河台大学教職論集, 4 : 39-52.
- 田井健太郎, 河合史菜, 元島菜美香, 久保田もか, 高橋浩二, 宮良俊行 (2018) 教員養成課程における模擬授業の省察に関する研究. 長崎国際大学論叢, 18 : 31-46.
- 高橋健夫 (2010) よい体育授業の条件. 高橋健夫ほか編著, 新版体育科教育学入門. 大修館書店, pp.48-53.
- 高橋健夫, 岡澤祥訓 (1994) よい体育授業の構造. 高橋健夫編著, 体育の授業を創る. 大修館書店, pp.9-24.